伝統芸能の舞台化と近代化：

先住民マオリの伝統芸能大会の開催とその変遷

神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート　協力研究員
国立民族学博物館　外来研究員（助成時）
天理大学　講師（現　在）

土井　冬樹

要約

本研究では、ニュージーランドの先住民マオリの伝統芸能の舞台化について考察した。マオリの芸能の舞台化は、観光や王室の訪問などのほか、植民地化において文化的実践を抑圧されていた中、文化を復興し、維持するために行われていた。調査の結果、舞台化は、オペラや現代音楽の要素を取り入れながら、ルールを策定して「よりよい」芸能の形態を作り出す中で進められたことがわかり、本研究では脱植民地化の思想と関連づけて検討した。

研究の目的

本研究の目的は、植民地状況下において文化的実践を抑圧されていたニュージーランドの先住民であるマオリにとって、文化復興と芸能の舞台化との関わりを歴史的および文化人類学的に議論することである。ここで取り上げる芸能とはカパハカと呼ばれるもので、マオリの一連の歌と踊りを演じる表現形式である。マオリの伝統的な芸能は儀礼などの機会に演じられてきたが、どのように舞台用の歌と踊りとして形成されていったのか、そもそもなぜ舞台化されたのか、マオリ社会はその変化をいかに受容したのかについて考察する。

マオリの概況

ニュージーランドの先住民であるマオリは、約 800 年前にポリネシア地域から移住した。2018 年の国勢調査では、全国民約 475 万人のうち、16%を占める 77 万人がマオリに出自を持つと回答している。マオリは、1840 年からイギリスの植民地支配を受け、その後同化政策や文化の抑圧を経験してきた。例えば、学校ではマオリ語を話すことが禁じられた。その結果、流暢なマオリ語話者は、1930 年代にはマオリの全人口の 96.6%だったが、1960 年代には 20%にまで落ち込んだ。マオリの芸能も、卑猥な活動であるとキリスト教のミッションによって禁止された。そして、いくつかの地域では芸能が継承されない事態にまで追い込まれた。

文化的実践が衰退していく中で、マオリたちは 1970 年代から先住民運動をはじめ、自己決定権や先住民としての権利を主張し、自らの文化の復興も目指した。そうした活動の中で、1972 年には全国カパハカ大会が開催されるようになる。第 1 回大会には 17 グループの参加があった。その後隔年

で全国大会は開催され、現在まで発展を続けている。新型コロナウイルスが蔓延する直前に開催された2019年の大会には159グループが参加した。

写真1．現在の全国カパハカ大会の舞台
（筆者撮影）

舞台化までの流れ

ニュージーランドでは、1860年から観光地化が進み、儀礼の文脈で演じられていた芸能が、観光ショーとして演じられるようになった。伝統的なマオリの歌にはハーモニーがなく、読経のようなものだった。西洋音楽に親しんだ20世紀初頭のマオリの若者たちは次第にマオリ文化に興味を示さなくなってきていた。そこで、ンガタという政治家は、若者の目を惹き、文化を復興し維持するために、ハーモニーを用いたメロディをマオリの芸能に導入した。その演目に人気が出ると、各地でマオリの芸能に取り組むグループが創設され、地域ごとに競うようになった。そして、カパハカ大会が組織され、全国大会も開催されるようになった。

舞台化による変容

舞台化されると、審査員が各々の芸能に順位をつけるようになった。それに伴って策定されたのが、明文化された芸能のルールである。リズムに合っているか、手を目で追いかけているか、よそ見をしていないかなどが審査された。これらのルールは、必ずしも芸能の形態を画一化したわけではなく、部族による違いを尊重したものではあったが、舞台化され、人の目に見られるものとして、「正しさ」と「美しさ」が整えられていった。

西洋音楽の受容という文化復興

西洋風のハーモニーを用いたメロディを採用するようになったことについて、植民地状況下にあったために芸能の実践が西洋化させられたと捉えるのは適切ではない。西洋的な文化要素の受容には、単に文化を維持し保存する、あるいは復興するだけではなく、植民地状況に抗い、またその状況から脱しようとする思想が関わっている。その思想は、カウパパ・マオリ（Kaupapa Māori）と呼ばれる脱植民地化のための方法論として近年議論されているものである。

カウパパ・マオリとは、マオリのやり方と説明される研究の方法論と認識枠組みであるとともに、マオリの過去、現在、未来に対して肯定的な変化をもたらす具体的な実践だとされる。これは、1980年代以降、学問の内部における先住民運動の一つとして注目を集め、議論されてきた。しかし、芸能の発展を見ると、1980年代以前からそうしたことが行われていた可能性が指摘できる。ンガタが、当時衰退する傾向にあったマオリ文化を復興するために西洋的な文化要素を取り入れたのは、マオリ語を話すことさえも禁じられていた状況を脱するための活動を可能にするためであり、カウパパ・マオリに基づく実践であったといえるからである。

おわりに：今後の課題に代えて

今回は芸能とカウパパ・マオリとの関わりを指摘するにとどまったが、今後は大会での演目やルールの変遷をさらに詳細に追いかけ、脱植民地化の思想がマオリ社会および芸能の中でどのように芽吹いたのか分析する。また、日本や各地の芸能の舞台化の事例と比較しつつ、伝統芸能をエンパワーメントする方法を探求したい。